

実学(複式簿記)への情熱と若者の未来

「明治二十年、初めて神田美土代町街に本校を設け『東京簿記精修学館』と称す。……」。これは、明治四十三年三月に出版された「実地応用簿記学教科書第一巻(二十版)」(校長大原信久著)の冒頭に記されている沿革略記である。そして、「その後、明治四十一年十二月、校名を改め大原簿記学



学校法人大原学園
理事長

安部辰志

方の簿記学校と思われる・筆者)を開く者あり、あるいは官庁に銀行に会社学校に商店に皆職務の要職に就いた。(一部現代語訳・筆者)と記されている。

故武市春男(本校の創立者)が複式簿記の必要性を痛感し、伝統あるこの学校の再興を願って昭和三十二年四月に設置した大原簿記学校の元がここにある。実は、大原家子孫の当主に再興を促すも、すでに別の道を行っており、残念ながらこれを引き継ぐことは出来なかった。しかし、創立メンバーに大原出版元社長大原盛司(同姓であったのも奇縁)がおり、大原家の子孫にもご了解をいただき、本校が開校した。

校と称したり、その間において本郷・日本橋・牛込・京橋・赤坂・麹町・芝・四ツ谷・本所・浅草の各区、水戸・長野・新潟・仙台の各市、及び栃木・群馬・千葉の各県に分校を設置した。そして、本校に入学する者数万人、その知識を極め生業を始めようとする者一万二千人、この中から中学舎(地

人々の織り成す深いご縁の中に、時代が必要としたものを世に広めることによって、経済を発展させ、社会基盤を安定させるよう、強い情熱を持って事に当たってきた人材がいたのである。さて、現在では、高卒生の約半数が大学を希望するようになったが、問題も少なくない。私は、大学は「(自)

らが〈大〉いに〈学〉ぶ」場であると考えている。そして大学側も本来、大学生とは自主的に学ぶよう定義されている。そして、今まさに就職活動では、現在のような不況時、学生側には強い思いと余程の自覚がないと内定を取れないのが現状である。

本学園の場合、各コースにおいて実学を主体とした教科と、社会人としての心得を入学当初から実践しているの、資格取得や就職においても好成績を残している。また、現在では新入学生の約四分の一は、大卒や短大卒あるいは中退者で占められている。

専門学校も大学もここで重要なことは、フリーターやニートを極力出さない社会を目指すことだ。そのためには、本人の能力にあった職業選択を早くから教育し、夢と能力にあった進路指導を授けることが重要である。私は、これを「ジャストフィット進路指導」と呼んでいる。

若者に勤労の大切さと素晴らしさを論じ、家族や地域を愛し、社会の一員としてどのような職業についても、かけがえない人材であることを教えなければならぬと痛感している。 ■